霊たちの世界と人間の死後の状態

44　霊たちの世界とは何か

四二一　霊たちの世界は天界ではなく、地獄でもなく、その二つのものの間の中間の場所または状態です――というのは、死後、人間は最初にそこにやって来て、その後、時が過ぎてから、世での自分の生活にしたがって、天界へ上げられるかあるいは地獄へ投げ込まれるからです。

四二二　霊たちの世界は天界と地獄の間の中間の場所であり、そしてまた人間の死後の中間の状態です――中間の場所であることは、地獄が下にあり、天界が上にあることから、また中間の状態であることは、人間がそこにいる間まだ天界の中にも地獄の中にもいないことから、私に明らかとなりました。

人間のもとの天界の状態は彼のもとに善と真理の結合があることであり、地獄の状態は彼のもとに悪と虚偽の結合があることです。

人間霊〔人間的な霊〕のもとで善が真理と結合する時、前述したように、その結合が彼のもとに天界であるので、天界に行きます――けれども、人間霊のもとで悪が虚偽と結合する時、その結合が彼のもとに地獄であるので、地獄に行きます。

この結合は霊たちの世界で行なわれます、その時、人間は中間の状態にいるからです。

あなたが理解力と意志の結合と言っても、あるいは真理と善の結合と言っても、同じです。

四二三　ここで最初に、理解力と意志の結合について、そしてその結合が善と真理の結合と同じであることについていくつか述べておかなくてはなりません、その結合が霊たちの世界で行なわれるからです。

人間には理解力があり、意志があります。理解力は真理を受け入れ、それから形作られます。そして意志は善を受け入れ、それから形作られます。それゆえ、人間が理解し、そこから考えるものはどんなものでも〔人間は〕真理と呼び、人間が意志し、それから考えるものはどんなものでも〔人間は〕善と呼びます。

人間は理解力から考え、ここから真理であるものを、また善であるものを把握することができます。しかしそれでも、それを欲さないで、行なわないなら、それを意志から考えていません――それを欲し、意志から行なう時、それは理解力の中と同じく意志の中にあり、したがって人間の中にあります。なぜなら、人間は理解力だけでも、また意志だけでもつくられないで、理解力と意志が一緒になってつくられるからです。それゆえ、両方の中にあるものが人間の中にあり、彼のものとされます――理解力の中にだけあるものは確かに人間のもとにありますが、それでも彼の中にありません。彼の単なる記憶の事柄であり、記憶の中の知識の事柄であり、それが自分自身の外にあって、自分自身の中になくても、他の者とともにいるときそれについて考えることができます。このように、それについて話し、推論し、それにしたがって情愛と振る舞いを偽り装うこともできます。

四二四　人間が理解力から考えることができ、それと同時に意志から考えないことができることは、改心することができるという目的のために備えられています。なぜなら、人間は真理によって改心され、真理は、

前述したように、理解力に属すものであるから――というのは、人間は意志に関してすべての悪の中に生まれているからです。ここから、人間は自分自身からでは他の者に善を欲せず、自分自身にだけ善を欲します。自分自身にだけ善を欲する者は、他の者に生じる不幸を喜び、自分自身のために好都合なときはなおさら喜びます。なぜなら、他の者の所有物すべてを、名誉であれ、あるいは富であれ、奪って自分自身のものにしようとし、このことができればできるほど自分自身の中で喜ぶからです。

この意志が矯正され、改心されるために、真理を理解し、真理によって意志から湧き出る悪の情愛を支配することが人間に与えられています――ここから、人間は理解力から真理を考え、それらを話すことも、またそれらを行なうこともできます。しかしそれでも、真理を自分自身から、すなわち、心から、欲し、行なう以前に、真理を意志から考えることはできません――人間がこのようなものである時、理解力から考えるものは彼の信仰に属し、意志から考えるものは彼の愛に属します。それゆえ、その時、彼のもとで、信仰と愛は理解力と意志のように結合しています。

四二五　そこで、理解力に属す真理が意志に属す善と結合していればいるほど、したがって、人間が真理を欲し、ここからその真理を行なえば行なうほど、それだけ人間は自分自身の中に天界をもちます、なぜなら、前述のように、善と真理の結合が天界であるからです。しかし、理解力に属すものである虚偽が、意志に属すものである悪と結合すればするほど、それだけ人間は自分自身の中に地獄をもちます、なぜなら、虚偽と悪の結合が地獄であるからです。けれども、理解力に属す真理が意志に属す善と結合していなければ、それだけ人間は中間の状態にいます。

今日のほとんどの人間はそれぞれ、知識から、また理解力から真理を考えて、それらの真理を多く行なうか、あるいはわずかに行なうか、あるいは何も行なわないか、あるいは悪の愛とそこからの信念から、それらの真理に反して行なうような状態の中にいます。それゆえ、その者に天界かまたは地獄があるために、死後、最初に霊たちの世界に連れて行かれ、そこで天界に上げられることになる者に善と真理の結合が行なわれ、地獄に投げ込まれることになる者に悪と虚偽の結合が行なわれます。

なぜなら、天界でも地獄でも、分裂した心をもつことは、すなわち、理解することと意志することが別ものであることは、だれにも許されないで、意志することは理解し、理解することは意志しなければならないからです――それゆえ、天界では、善を意志する者は真理を理解し、地獄では、悪を意志する者は虚偽を理解しなくてはなりません――それゆえ、善い者のもとの虚偽は取り去られ、彼らの善に適合し、一致する善が与えられます。そして、悪い者のもとの真理は取り去られ、彼らの悪に適合し、一致する虚偽が与えられます。

これらから、何が霊たちの世界か明らかです。

四二六　霊たちの世界には、すべての者が最初にそこに集まり、そこで調べられ、準備させられるので、おびただしい数の霊がいます。

そこの霊の存続期間は定まっていません。ある者は、そこに入るだけで〔滞在せずに〕、天界に上げられるか地獄に投げ込まれるかします。ある者は、そこに数週間だけとどまります。数年とどまる者もいます、しかし三十年を越えることはありません――存続期間の違いは、人間の内的なものと外的なものが対応するか対応しないかによって起こります。

しかし、人間がその世界の中である状態から他の状態にどのように連れて行かれ、準備させられるかは、このあと述べます。

四二七　人間は死後、霊たちの世界にやって来るとすぐに、主により完全に区別されます――悪い者は直ちに地獄の社会に結びつけられます、世で支配愛に関してその社会にいたのです。そして、善い者は直ちに天界の社会に結びつけられます、愛・仁愛・信仰に関して世でもまたその社会にいたのです。

しかし、このように区別されても、それでもその世界の中で、いのちが身体の中にあったときの友や親しかった者は、願う時、特に妻と夫は、また兄弟と姉妹は、出会い、互いにいろいろなことを話し合います。

私は、父親が六人の息子と語り、彼らを認めたのを見ました。そして、自分の親類や友とともにいる他の多くの者を見ました。しかし、世での生活から性格(アニムス)が異なっていたので、しばらくしてから別れました。

しかし、霊たちの世界から天界へ、また地獄へ行く者は、似た愛からの似た性格(アニムス)の者でないかぎり、彼らはその後、もう互いに見ることも、互いに知り合うこともありません。

天界と地獄ではなく、霊たちの世界で、お互いを見ることの理由は、霊たちの世界にいる者は、ある状態から他の状態の中へと、いのちが身体の中にあったときと似た状態に導かれるからです。しかし、その後、すべての者は自己愛が支配している状態と似た不変の状態にされ、その中ではお互いを愛の類似性だけから知ります。なぜなら(前の**四一**～**五〇**番に示されたように)、似ているものは結合し、似ていないものは分離するからです。

四二八　霊たちの世界は、人間のもとで天界と地獄の間の中間の状態であるように、そのようにまた中間の場所です。下に地獄があり、上に天界があります。

すべての地獄はその世界に対して閉ざされています。ただ岩のような穴や割れ目によって、また側面にある裂け目によってだけ開かれています。それは許可なしにだれかが外に出ないように見守られていて、何かの必要から求められると許可されますが、そのことについてはこのあとで述べます――天界もまたあらゆる側が囲まれていて、天界の何らかの社会への通路も、狭い道を通る以外に開いていません、その入り口もまた見守られています。

それらの出口や入り口は、みことばの中で、天界と地獄の「門」や「入り口」と呼ばれるものです。

四二九　霊たちの世界は、山と岩の間にあって、あちこちで入り込んだり、高くなったりしている谷間のように見えます。

天界の社会への門や入り口は見えないで、ただ天界へ準備された者にだけ見え、他の者には見つけられません。霊たちの世界から〔天界の〕それぞれの社会へ行く一つの入り口とその先に一つの道があり、それは上り道であり、多くに分かれています。

地獄への門や入り口も入ることになっている者以外には見えません。開かれる時、彼らに、うす暗くてすすで汚れたような洞穴が開いて、深淵へと斜めに下へ向かっているのが見え、そこに再び多くの入り口があります――その洞穴を通して、忌まわしくていやな悪臭が発散されており、善い霊は、いやでたまらず、その臭いから逃げ去ります、しかし、悪い霊は快いので欲しがります。なぜなら、世でそれぞれの者が自分自身の悪

を喜んだように、死後、その者の悪に対応する悪臭を喜ぶからです。このことは、カラス・オオカミ・ブタのような捕食性の鳥や野獣に比較することができます、それらの動物は死肉や糞の臭いを認めると、飛びかかり、走り寄ります。

私は、ある者が天界から流れ出る発散気に打たれたとき、内部の苦痛からかのように彼が声高に叫ぶのを聞きました。そして、彼が地獄から流れ出る発散気に打たれたとき、静かになり、うれしくなりました。

四三〇　それぞれの人間のもとにもまた二つの門があり、その一つは地獄に向けて、悪とそこからの虚偽に開いています。もう一つの門は天界に向けて、善とそこからの真理に開いています。

地獄の門は悪の中とそこから虚偽の中にいる者に開かれていて、上から隙間を通るほどの、いくらかの光が天界から流入し、その流入によって人間は考え、推論し、話すことができます。けれども、天界の門は善とそこからの真理の中にいる者に開かれています。

というのは、人間の理性的な心へ導く二つの道があるからです。高いあるいは内なる道は、それを通って主から善と真理がやって来ますが、低いあるいは外なる道は、それを通って地獄から悪と虚偽が忍び込みます。

理性的な心そのものは真ん中にあって、そこへそれらの道が向かっています。ここから、天界から光が入れば入るほど、それだけ人間は理性的です。けれども、入らないなら、どれほど自分自身が理性的に見えても、理性的ではありません。

さらにまた、人間に天界や地獄とどのような対応があるか知られるために次のことが言われました――

人間の理性的な心が形作られている間、その心は霊たちの世界に対応し、その心の上にあるものは天界に、下にあるものは地獄に対応する――天界に向けて準備されている者には、その上にあるものが開かれ、彼のもとへ流入する悪と虚偽に対して、その下にあるものは閉ざされる。しかし、地獄に向けて準備されている者には、その下にあるものが開かれ、彼のもとへ流入する善と真理に対して、その上にあるものは閉ざされる――ここから、前者は自分自身の上しか眺めることができない、すなわち、天界に目を向ける。後者は自分自身の下しか眺めることができない、すなわち、地獄に目を向ける。

自分自身の上を眺めることは、主に目を向けることです、その方は共通の中心であられるので、天界のすべての者がそこへ目を向けます――しかし、自分自身の下を眺めることは、主から後ろ向きに目を向けることです、地獄のすべて者はそこへ目を向け、向かいます（前の**一二三**、**一二四**番参照）。

四三一　これまで、霊と呼んだ者は霊たちの世界にいる者を、しかし、天使と呼んだ者は天界にいる者を意味します。

45　それぞれの人間は自分の内的なものに関して霊である

四三二　正しく熟考する者は、身体は物質的であるので〔身体が〕考えるのではなく、霊魂は霊的であるので〔霊魂が〕考えている、と知ることができます。

人間の霊魂は、その不滅について多くの者が書いていますが、彼の霊です。というのは、霊はそのすべてに関して不死であるからです。この霊もまた身体の中で考えるものです。なぜなら、霊は霊的なものであり、霊的なものは霊的なものを受け入れ、霊的に生きるからであり、そのことは考えることと意志することです。

そこで、身体の中に現われるすべての理性的ないのちは、霊的なものであり、身体に属すものではまったくありません――前に言われたように、身体は物質的であるからです。そして物質的なものは、身体に固有のものであり、霊に付加され、ほとんど霊に接合しています、その理由は、すべてのものが物質的であり、それ自体にいのちを欠いている自然界の中で、人間の霊が生きて、役立ちを実行することができるためです。

また、物質的なものは生きていないので、ただ霊的なものだけが生きているので、何であれ人間のもとで生きているものは彼の霊であり、身体は生きて動く力をもつ道具そのもののように、単に霊に仕えるものであることを明らかにすることができます――確かに、道具について、働く、動く、または打つ、と言われます、それでも、働き、動き、打つ者がその道具によってそうするのであって、道具が働き、動き、打つ、と信じることは感覚の欺きです。

四三三　身体の中で生きていて、いのちから働き、感じるすべてのものは、もっぱら霊に属すものであり、身体に属すものは何もないので、霊は人間そのものであることがいえます。あるいは同じことですが、本質的に見られた人間は霊です、そしてまた人間と同じ形の中に見られます――なぜなら、何であれ人間の中で生き、感じるものは彼の霊であり、人間の中でその頭から足の裏まで、生きていないもの、感じないものは何もないからです。ここから、身体がその霊から分離されるとき、それは死と呼ばれますが、やはり人間は人間としてとどまり、生きています。

私は天界から、「死んだ者は、生き返る前に、棺台の上に横たわって、自分の冷たい身体の中でも考えています。その者は、自分が今なお生きている、としか知りません。しかし、身体に固有のものである物質のどんな小部分すら動かすことができないという相違があります」と聞きました

四三四　人間は、主体(対象)がないなら、考えることも意志することもできません、実体(物質)は主体から、また主体の中にあります。実体(物質)的な主体なしに存在するようになると考えられるものは無です。

そのことは、人間が視覚の主体である器官がなくて見ること、聴覚の主体である器官がなくて聞くことができないことから知ることができます。視覚と聴覚はそれらの器官がなくては無であり、存在もしません。

このようにまた、内なる視覚である思考と内なる聴覚である知覚も、これらが実体の中に、また実体から存在しなかったなら、まったく存在しません、それらは器官の形であり、その主体です。

これらから、人間の霊は身体から分離されたとき、その身体の中にあったときのように、等しく形の中に、人間の形の中に存在して、等しく感覚器官と感覚を享受すること、また目のいのちのすべてのもの、耳の

いのちのすべてのものは、一言でいうと、人間に属す感覚のいのちのすべてのものは、身体に属すものではなく、身体の中の、身体の最も個々のものの中の霊に属すものであることを明らかにすることができます。

ここから、霊は人間と等しく、見、聞き、感じ、身体から解放された後は、自然界の中でなく、霊界の中でそうします。霊が身体の中にあったとき自然的に感じたものは、付け加えられていた物質を通してでしたが、その時やはり、考え、意志する中で同時に霊的に感じていたのです。

四三五　これらのことを述べた理由は、本質的に見られた人間は霊であること、また自然的で物質的な世界での働きのためにその霊に付け加えられている身体は人間ではなく、その霊の単なる道具であることを理性的な人間に納得してもらうためです。

けれども、正しい推論は、多くの者には理解されないで、反対のものを確信した者により、感覚の欺きからの誤った推論によって疑わしいものに変えられてしまうので、経験から確信するほうが望ましいでしょう。

正反対のものを確信した者によくあることですが、「獣も同じように生き、感じ、このように獣にもまた人間と同じく霊的なものがある。それでもその霊的なものは身体とともに死ぬ」と考えています――しかし、獣の霊的なものは、人間の霊的なもののようではありません。人間には最内部のものがあり、その中に神性(神的なもの)が流入し、それ自体を高揚させ、そのことによってそれ自体に神性を結合させますが、獣にはそれがないからです。ここから獣に比べて、人間は、神について、天界と教会のものである神性について考え、その神性の中で神を愛し、こうしてその方と結合することができます。神性と結合できるものは、消し散らすことができません――しかし、神性と結合できないものは、消し散らされます。

獣と比べて、人間にある内的なものについては前に扱いました(**三九**番)。欺きに捕らえられ、知識の欠如そして知性が開かれていないために、多くの者にこれらのことについて理性的に結論することができないことが生じており、その欺きが追い払われることが重要であるので、再び思い出さなくてはならないことばがあります。

それらは次のものです――

「私は、三つの天界の天使について、あるアルカナ(秘義)を記します。段階について(このことについては**三八**番)理解しなかったので、以前にはだれの心の中にも入ってきたことのないものです。すなわち、それぞれの天使、そしてまたそれぞれの人間のもとに、最内部のまたは最高の段階、または最内部のものとある種の最高のものがあり、その中に主の神性が最初にまたは最も近く流入して、そこから、そのもとに継続する秩序の段階にしたがって他の内的なものを配列することです。

この最内部のものまたは最高のものは、天使や人間へ入る〝主の入り口〟、そして彼らのもとのまさに〝主の住居〟そのもの、と呼ばれることができます。

この最内部のものまたは最高のものによって、人間は人間であり、獣から区別されます、なぜなら、獣にはないからです。

ここから、人間は、動物と異なって、心(mens)とアニムス(外的な心)に属す内的なものすべてに関して、主により、主ご自身へと上げられることが、その方を信じること、その方に愛を感じること、こうしてその方を見ること、また知性と知恵を受け入れること、また理性から話すことができます。永遠に生きることもまたここからです。

けれども、主により何がその最内部に配列され、備えられるかは、天使の思考を超えており、その知恵を上回っているので、天使のだれかの知覚の中へ、はっきりと流入することはありません」。〔これは**三九**番です〕

四三六　人間は自分の内的なものに関して霊であることは、私に多くの経験によって知ることが与えられており、もし私がそのすべてのものを提示するなら、よく言われるように、〝紙面を満たす〟でしょう。

私は霊として霊と話し、身体の中の人間として彼らと話しました。私が霊として彼らと話したとき、彼らは私が霊そのものであり、彼らのように人間の形をしているとしか知りませんでした。私が霊として話したとき、私の身体の物質は見えなかったので、私の内的なものがこのように彼らの前に見えたのです。

四三七　人間が自分の内的なものに関して霊であることは、身体が分離した後、そのことは死ぬときに起こりますが、それでもその後、人間は以前のように生きることから明らかです。

このことを確信するために、いのちが身体の中にあったとき私がよく知っていたほとんどすべての者と話すことが私に与えられました。ある者とは数時間、ある者とは数週間および数か月、またある者とは数年間であり、このことの理由は特に、私が確信し、証言するためでした。

四三八　これらのことに付け加えることが許されています。それぞれの人間は、身体の中に生きている時でも、自分の霊に関して他の霊とともに、霊によって善い者は天使の社会の中に、また悪い者は地獄の社会

の中にいること、それでもそのことを知らないこと、またその同じ社会に死後にやって来ることです。

このことはしばしば、死後、霊の間にやって来る者に言われ、示されました。

世に生きているとき、確かに、人間は霊の社会で霊として見られません、その理由は、そのとき自然的に考えているからです。けれども、身体から切り離されて考える者は、その時、霊の中にいるので、時々、霊の社会の中で見られ、見られるとき、そこにいる霊からはっきりと見分けられます、というのは、その者は瞑想しながら歩き、黙っていて、他の者を見もしないし、見てもいないようであるからです。そして何らかの霊がその者に話しかけると直ぐに消えます。

四三九　人間は内的なものに関して霊であることが説明されるために、私は、人間が身体から導き出されるとき、どのようになるか、また霊により他の場所へ連れ去られるとき、どのようになるか、経験から語ることにします。

四四〇　最初のもの、すなわち、〝身体から導き出されること〟はこのようです――人間は、眠りと目覚めの中間のある状態に導かれ、その状態の中にいるとき、完全に目覚めているとしか知りません。すべての感覚は、視覚と同じく聴覚も、また驚くべきことに触覚も、最高に身体が目覚めているように目覚めています。それらはその時、身体が目覚めの中で存在することのできるどんな場合よりもさらに敏感です――その状態の中でもまた霊と天使が生きいきと見られ、聞かれ、また奇妙なことに、触れられ、その時、ほとんど、身体に属すものは何も介在しません。

「身体から導き出される」〔エゼキエル書三・一二、一三参照〕、「身体の中にあるいは身体の外にいるか知らない」〔コリントⅡ一二・二参照〕と言われているものは、この状態です。

私はこの状態の中に、私がただそれがどのようなものであるか、同時に霊と天使が、人間もまた、霊に関して、身体から導き出されている時、すべての感覚を享受していることを知るために、ただの三度か四度だけ入れられました。

四四一　もう一つのものである〝霊により他の場所へ連れ去られること〟について、生きいきとした経験によって、私に、それがどんなものであるか、またどのように行なわれるか示されました、しかし、このことはただの二度か三度だけでした。その経験を一つだけ示します。

都市の街路を、また平原を通って、歩きながら、その時、霊と話してもいましたが、私は自分がいつものように目覚めて、「見ている、間違えないで歩いている」としか知りませんでした。その間、私は、木立ち・川・宮殿・家・人間、また多くものを見ながら、幻の中にいました。

しかし、このように数時間、歩いた後で、突然、私は身体の視覚の中にいて、自分が他の場所にいることに気づきました。そのことに非常に驚き、私が、「霊により他の場所に連れ去られる」〔列王記Ⅰ一八・一二、一九・八、使徒八・三九参照〕と言われている者のような状態の中にいたことを認めました。なぜなら、この状態が続く時、道について、これが何マイルあったにしても何も考えず、時間についても、数時間あるいは数日であったにしても、考えることはないからです。疲労もまた少しも感じられません。さらにまたその時、自分自身の知らない道を通って、それでも定められた場所へ間違いなしに導かれます。

四四二　しかし、人間のこれらの二つの状態は、内的なものの中にいるときの、あるいは同じことですが、霊の中にいるときの状態であり、異常なものであって、教会内で知られているので、それがどんなものであるか私が知る目的のためにだけ、私に示されました。しかし、霊と話し、彼らのひとりであるかのように彼らとともにいることは、身体がまったく目覚めた中でも与えられ、このことが今では数年間も続いています。

四四三　人間は自分の内的なものに関して霊であることは、前に「天界と地獄は人類から存在する」ことについて扱われているところに言われ、示されたものから(**三一一～三一七**番)、さらに証明することができます。

四四四　人間が自分の内的なものに関して霊であることは、その思考と意志に属するものに関して霊であることを意味します。これらは内的なものそのものであり、人間を人間であるようにするものであり、内的なものに関してどのようであるかによって、人間もそのようなものであるからです。

46　人間は死から生き返り、永遠のいのちの中へ入る

四四五　身体がもはや霊界から存在する霊の思考と情愛に対応する機能を自然界で果たすことができない時、人間は死ぬと言われます。

これは肺の呼吸運動と心臓の収縮運動が止まるときに起こります。

しかし、それでも人間は死にません、世で彼に役立った身体から分離されるだけであり、人間自体は生きているからです。

人間自体が生きていると言われるのは、人間は身体からでなく霊から人間であるからであり、人間の中の霊が考え、その思考が情愛とともに人間をつくるからです。

ここから、人間は死ぬとき、単に一つの世界からもう一つの世界へ渡るだけのことが明らかです。

ここから、みことばの中で「死」は、その内意で、生き返りと、いのちの継続を意味します。[*1]

四四六　呼吸と心臓の運動に霊の最内部からの伝達があります、その思考が呼吸に、愛に属す情愛が心臓に伝達されます。[*2] それゆえ、身体の中でこれらの二つの運動が止まるとき、直ちに分離があります。

肺の呼吸と心臓の鼓動である二つの運動は、きずなそのものであり、そのきずなが破られると、霊はその

＊1　みことばの中の「死」は生き返りを意味する、人間は死んでも、そのいのちは存続するからである(三四九八、三五〇五、四六一八、四六二一、六〇三六、六二二一番)。

ままに残り、その時、身体は霊のいのちがないので、冷たくなり、腐ります。

霊の最内部からの伝達が人間の呼吸と心臓の運動にあることは、生命のすべての運動は、全般的にだけでなく、すべての部分でもまた、呼吸と心臓の運動によるからです。[*3]

四四七　人間の霊は、分離の後、身体の中にしばらくの間とどまりますが、心臓の全面的な停止よりも長く続くことはなくて、人間が死ぬ病気の状態にしたがって変化します。なぜなら、心臓の運動は、長い間続く者も、また長く続かない者もいるからです。

この運動がやむと直ぐに人間は生き返ります。しかし、このことは主おひとりにより行なわれます。

人間の霊を身体から連れ出すことと霊界へ導入することが生き返りによって意味され、このことは一般的に「復活(よみがえり)」と呼ばれます。

人間の霊が身体から分離されるのは心臓が止まるときよりも前でないことの理由は、心臓は愛のものである情愛に対応し、愛は人間のいのちそのものであり、愛からそれぞれに生命力の熱があるからです。[*4]それゆえ、この結合[*注]が続くかぎり、それだけの間、対応があり、ここから身体の中に霊のいのちがあります。

＊注　この「結合」をS. Nobleは「運動」と読み替えています。

四四八　どのように生き返りが行なわれるかは、私に言われただけでなく、生きいきとした経験からも示されました。どのようなものが行なわれるか私が十分に知るようにとの理由から、私はまさにそのことを経験しました。

四四九　私は身体の感覚に関して無感覚の状態に、このようにほとんど死の状態の中へ導かれましたが、それでも思考とともに内的に完全ないのちにとどまりました。死から生き返る者に起こり、起こったことを私が知覚して、それらの記憶を保有するためにです。

私は、身体の呼吸がほとんど取り去られ、希薄で音を伴わない身体の呼吸と結合した霊のものである内的な呼吸が残っていることを知覚しました。

天的な王国は人間の心臓に対応するので、その時、はじめて心臓の鼓動に関してその王国と伝達が与えられました[*5]——さらにまた、私はそこからの天使を見ましたが、何人かは遠くにいて、ふたりが頭の近くに座り

＊2　心臓は意志に対応し、そのように愛に属す情愛にも対応し、肺の呼吸は理解力に、そのように思考に対応する(三八八八番)。
ここから、みことばの中の「心臓(cor)」は、意志と愛を意味する(七五四二、九〇五〇、一〇三三六番)。
「霊魂」は、理解力・信仰・真理を意味する。ここから「霊魂からと心(cor)から」は、理解力・信仰・真理から、また意志・愛・善からを意味する(二九三〇、九〇五〇番)。
〝最大の人〟すなわち天界と、心臓や肺の対応について(三八八三〜三八九五番)。

＊3　心臓の鼓動と肺の呼吸は全身を支配しており、相互にどこへでも流入している(三八八七、三八八九、三八九〇番)。

＊4　愛は人間のいのちのエッセ(存在)である(五〇〇二番)。
愛は霊的な熱であり、ここから人間の活力そのものである(一五八九、二一四六、三三三八、四九〇六、七〇八一〜七〇八六、九九五四、一〇七四〇番)。
情愛は愛の連続したものである(三九三八番)。

＊5　心臓は主の天的な王国に対応する、けれども、肺は主の霊的な王国に対応する(三六三五、三八八六、三八八七番)。

ました。そこで、すべてのプロプリウム(固有のもの)の情愛は取り去られましたが、それでも、思考と知覚は残りました。

[2]私はこの状態の中に数時間いました。その時、私のまわりにいた霊は、私が死んでいると思って退きました。防腐処置を施した死体からのような芳香性の匂いも感じられました。なぜなら、天的な天使がいる時、死体からは芳香のようなものが感じられ、霊がこれを感じるとき、近づくことができないからです。このように、はじめて永遠のいのちへ導き入れられるときもまた、人間の霊から悪い霊は押しとどめられます。

頭のそばに座っていた天使は、黙っていて、単にその考えを私に伝達していました。その考えが受け取られるとき、天使は人間の霊が身体から連れ出せるような状態の中にあることを知ります。

彼らの思考の伝達は、私の顔を見ることによって行なわれました。天界の中ではこのように思考の伝達が行なわれるからです。

[3]どのように生き返りが行なわれるかを私が知り、記憶しているために、私に思考と知覚が残っていたので、私は、天使が最初に私の思考について、それはたいてい永遠のいのちについてですが、死ぬ者と似たものであるかどうか調べ、その思考の中に私の心(mens)を保とうと欲していることを知覚しました。

その後、「人間の霊は身体が息絶えるとき、それでも自分の最後の思考の中に保たれ、それから世で共通のあるいは支配していた自分の情愛からのものである思考へ戻ります」と言われました。

特に、私の心のものである内的なものが、このように私の霊が、吸引されること、身体から引き裂かれるようであったことを知覚し、感じることが与えられ、「これは主からなされ、ここから復活がなされます」と言われました。

四五〇 天的な天使は生き返る者のもとにいるとき、だれをも愛しているので、彼を置き去りにしません。しかし、その霊が天的な天使の交わりの中にいることがこれ以上できないようなものである時、その霊は彼らが去ることを望みます。そのことが起こるとき、主の霊的な王国から天使がやって来て、彼らによってその霊に光の享受が与えられます、なぜなら、以前には何も見ないで、ただ考えるだけであったからです――このことがどのように起こるかもまた示されました。

あたかも左の目の被膜を鼻の中隔(鼻柱)に向けて巻き取るかのようにしている天使が見られました、目を開け、見ることができるようにするためです。霊は、そのようになされるとしか把握しません、しかし外観です。

被膜を巻き取ることが見られるとき、ある輝くものが見えます、しかし、人間が目覚めるとき最初にまぶたを通して見る時のように、ぼんやりしたものです。私には、このぼんやりした輝きは天界の熱からのものに見えました。しかし、その後、「これには変化が伴っています」と言われました。

その後、あるものが顔から優しく巻き取られるのが感じられ、それがなされると、霊的な思考がもたらされます――それを顔から巻き取ることもまた外観です、なぜなら、そのことによって、自然的な思考から霊的な思考にやって来ることが表象されるからです。

天使は、生き返ることにより、愛から味わうもの以外に何らかの観念が生じないように、最高度の働きで用心し、その時、彼に霊であることを言います。

霊的な天使は、光の享受が与えられた新しい霊に、その状態の後で、望むあらゆる親切を常に行ない、来世にあるものについて、把握することができるかぎり教えます。

しかし、もし生き返った者が教えられることを欲しないようなら、その時、彼は天使の交わりから去るこ

とを願います。しかしそれでも、天使は彼を置き去りにしないで、彼が自分自身を天使から引き離します。天使はだれをも愛し、親切にすること、教えること、天界に連れて行くことを何よりも望み、このことに彼らの最高の喜びがあるからです。

その霊が自分自身をこのように引き離すとき、善霊によって迎えられ、彼らとの交わりの中にいるとき、またも彼にあらゆる親切がなされます――しかし、もし彼の生活が世で、善の交わりの中にいることができないようなものであったなら、その時もまた、彼らから去ることを願い、このことが、世での彼の生活と完全に一致するような者と交わって、彼らのもとで自分自身の生活を見いだすまで、それだけ長く、何度もあります。その時、驚くべきことに、世で送ったのと同じような生活を送ります。

四五一　しかし、死後の人間のこの生活(いのち)の始まりは、数日間しか続きません。

けれども、その後、ある状態から他の状態へ、最終的に天界あるいは地獄へ、どのように連れて行かれるか、このあとで述べます。このこともまた多くの経験によって知ることが与えられました。

四五二　私は、死の三日後に、ある者と話しましたが、その時、前に述べたこと(**四四九**、**四五〇**番)が起こりました。さらにまた、世で私に知られていた三人の者と話し、私はその者たちに、「今、あなたがたの身体が埋葬され、葬式が準備されています」と語りました――私は、「あなたがたが埋葬されています」と言いました。そのことを聞くと、彼らはある種の驚きに襲われながらも、「私たちは生きている。世で自分たちに役立ったものを埋めるだけのことである」と言いました。

その後、彼らは、身体の中に生きたとき、死後にこのようないのちがあることを信じなかったことを、特に教会内のほとんどすべての者が信じなかったことを大いに不思議がりました。

身体の生活(いのち)の後、何らかの霊魂の生活(いのち)があることを世で信じなかった者は、自分自身が生きていることに気づくとき、大いに恥じます――しかし、死後の生活(いのち)がないと確信した者は、似た者たちと仲間になり、信仰の中にいた者から分離されます。そのような者の大部分は、神性もまた否定し、教会の真理を軽蔑するので、地獄のある社会と結び付けられます。ある者が自分の霊魂の永遠のいのちに反することを確信すればするほど、それだけ天界と教会に反することもまた確信するからです。